

第 19 回日本消化管学会総会学術集会・第 16 回日本カプセル内視鏡学会学術集会合同セッション

「IBD の診断・治療における各種検査の役割」

司会 大宮 直木（藤田医科大学先端光学診療学講座）

大塚 和朗（東京医科歯科大学病院光学医療診療部消化器内科）

炎症性腸疾患（IBD）の病勢把握や治療効果判定には各種バイオマーカーが有用であるが、確定診断や狭窄、瘻孔、炎症性発癌等の合併症の診断には消化管造影、上下部・小腸内視鏡・病理検査、カプセル内視鏡に加え CT や MRI 等の横断的画像診断も必要であり、長期予後改善のための Treat-to-Target 戦略においても定期的な評価が勧められている。また、狭窄や IBD 関連腫瘍に対し、近年は積極的に内視鏡治療が行われている。本主題では IBD の診断・治療における各種検査の有用性や課題、今後の展望を幅広く討論したい。